

教会と城

詩編 122:1-9

賈 晶淳

この夏の休暇は妻と二人でバックパックを背負い、ユーレイルパスを使った列車でヨーロッパを周る旅をして来た。出かける前にはヨーロッパの暑さとコロナ禍で弱っていた体力のことを心配したが、トルコとスペインを除いて他のところは涼しかったことや旅を重ねることで足の力や体力も徐々に戻って来た。今回訪ねた都市や町を順番に紹介すると、イスタンブール、ウィーン、クラコウ、アウシュビッツ＝ビルケナウ、プラハ、ベルリン、ヴィッテンベルク、フランクフルト、ケルン、パリ、バルセロナ、モンセラート、ロンドン、ダブリン、ゴールウェーの15ヶ所(9ヶ国)である。

旅の前に訪ねたい国や町に関する歴史書などを読み、改めて確認したことはヨーロッパの歴史はキリスト教抜きでは理解できないことであった。今回の旅ではこのことを確認するものでもあった。訪ねた殆どの町の中央には塔がどの建物より高く聳えている教会があり、その周りを城や町が囲むように作られていた。このことから本日の証詞の題を「教会と城」にした。

証詞の前に歌った讃美歌 21・377 番、「神はわが砦」は宗教改革者のマルティン・ルターの作詞・作曲のものである。讃美歌は「神はわが砦(城)」という歌詞で始まっている。訪ねた町の一つであるヴィッテンベルクはベルリンから ICE 高速列車で小一時間の距離に位置するルターの宗教改革のきっかけとなった町である。讃美歌の歌詞には宗教改革のため多くの脅威の前に立たされ、神の助けを求めているルターの心境が表われているが、写真に見える塔は教会の塔であり、町の中で一番高く、きっと見張りの役割もあったと考えられる。



ヴィッテンベルクの諸聖人(城)教会

詩編 122 編に出ているエルサレムとは神殿と城、まさに教会と城を象徴し、ヨーロッパの町のモデルでもあったと思われる。詩編 122 編で主の家(1 節、9 節)はエルサレム神殿(教会)を示すものであり、城門(2 節)、城壁と城郭(7 節)は城を示している。ヨーロッパのどの町でも確認できたことで、城や宮廷の高さは教会の塔より低いことであった。例えば、プラハのカレル橋から撮った写真からも確認できるように、プラハ城の全景の中で教会の本体は見えないがその屋根と尖塔が城の頭越しに見えている。このことは当時の教会の権威が世俗の権威の上にあったことを象徴している。

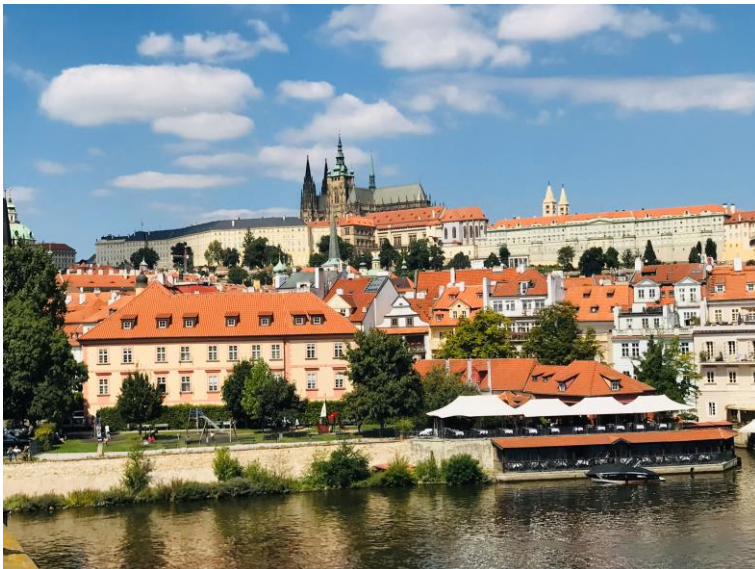
スペインのバルセロナで泊まったホテル部屋の壁にバルセロナの幾つかの高い建物が描かれていた。その中にガウディが設計し、100 年以上前から今も建て続けているサグラダ・ファミリア大聖堂もあったが何故か二番目

の高さであった。大聖堂を訪ねた時にその理由が分かった。大聖堂の幾つもある塔の中で最も高いイエスの塔(172.5m)が未完のままであるからであった。バルセロナでは建物をこのイエスの塔より高く建ててはならないという話もある。まさに現代版の教会と城の物語である。ドイツのケルンで見た大聖堂は現在でも世界最大のゴシック建築物であると言われているが、完成された当時は世界一の高さ(157m)を誇っていたと言われている。

詩編 122 編が主に求めている内容は平和で、関連する言葉が 6 節、7 節、8 節に 5 回出ている。このように繰り返し平和を求めているのは、この詩が歌われていた時の状況が平和とは逆であったことを示す可能性もある。例えば、戦争の前兆が見えた時、或いは戦争の最中、または戦争が終わった後の状況である。平和が最も欲しい時、或いは平和を感謝したい時である。安定した時間が長く続くと人々は戦争や平和のことを忘れる。

9 月 1 日は関東大震災の 100 周年の日。9 月 30 日に松野博一官房長官が記者会見で関東大震災の時の朝鮮人虐殺に関する事実を示す記録は政府内にないというような発言をした。過去の事実と記憶をもみ消そうとする、まさに平和ボケを狙った歴史修正主義者の発言であった。旅先のベルリンで見たベルリンの壁の跡やナチの犠牲になったユダヤ人を記念するモニュメントは過去の負の記憶を決して忘れないように努めているドイツの姿だと理解した。

城の役割は戦争を起こすためでなく、戦争から城の中の人々を守ること、即ち防御によって平和を維持することである。しかし、外に向けて頑丈な城壁や城門であっても堀の中から崩れる場合がある。戦争が起きると心理戦も同時並行する。相手側に混乱を狙うためである。混乱は内部からの崩壊の原因となる。内側から城門が開かれ引き渡される。旧約聖書の戦争物語にはこのような話が幾つも出ている。そのために城の内側で平和を維持するのは最も大事なことである。3 節に、「エルサレム、都として建てられた町。そこに、すべては結び合い」という表現があるが、内側が一つになることと思われる。そして、そのために 5 節が言う「そこにこそ、裁きの王座」が必要となる。裁きとは正義という意味をも持つ。世俗の王より神の権威を示している。そして人々はその権威との契約を結び、それを人々が公正に守ることで内側の平和が守られるようになる。その時に裁きの王座を象徴するのは主の家である。



プラハ城と聖ヴィート大聖堂

それから四節にその城には主の部族全てが上って来るという表現がある。一部の選ばれた人しか入れない城であれば、それこそ内なる敵を作ることになるだろう。今の世界にも見えない城があり、その外に置いておかれる人々が増えつつある。差別や疎外から格差問題や難民問題などが起きている。全ての人々が城に入り、平和に生きることを一緒に祈りたい。

エルサレムの平和を求めよう。

「あなたを愛する人々に平安があるように。

あなたの城壁のうちに平和があるように。

あなたの城郭のうちに平安があるように。」

わたしは言おう、わたしの兄弟、友のために。

「あなたのうちに平和があるように。」（6 節、7 節、8 節）（2023 年 9 月 3 日証詞より）